

---

# ネコでも!

野雲 数夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネコでも！

### 【Nコード】

N12570

### 【作者名】

野雲 数夜

### 【あらすじ】

ニートな男が死んで、異世界で負債返済を目指す話し、だけど…

## プロローグ（前書き）

はじめまして、拙い文ですがこれからよろしくお願ひします。

## プロローグ

何もない人生だった。

何もする気が出ず、ただ寝て起きてを繰り返す日々。どうしてこうなったのか、いつからこんなふうになってしまったのか、今ではそれすら思い出すことができない。

ただ一つ言えるのは、俺が空っぽで何もない、本当にどうしようもない人間という事だけだ。

薄れる意識のなかを今まで経験した出来事がゆっくりと流れていく。

薄っぺらで、本当に何もない、下らない人生。

こうして、俺《渡 幸一》の人生は幕を閉じたのだった。

## プロローグ（後書き）

みじかつ

なんといつ短々。

## 一話

「お……る……」  
唐突に何か聞こえた気がした。

二月二十日、俺は昼までいつもの通り家でごろごろしていたのだが、何故だかその日は外に出たくなったのである。本当に何で外に出ようなんて思ったのか、俺にもよく分からない。きつとただの気まぐれだろう。

「……き……す」  
また何か聞こえたような……気のせいかな？

とにかく、俺は久しぶりに外に出たのである。外出するのは大体二年ぶりくらいだろうが、外の様子は俺の記憶にある風景とは大分違うものになっていた。建設途中だったビルが完成していたり、よく通っていた本屋が潰れていたりした。浦島太郎にでもなったかのような気分でフラフラ街を歩いていると、いつの間にか夜になっていた。そろそろ帰ろうかと思いき返すと、すぐ近くで甲高い騒音が聞こえた。

驚いて音のした方を向く、まばゆく光るライトが直前に迫っていた。硬直する体。

鈍く、何かが潰れる音がした……段々と意識が遠くなって……

「起きるっす!!」

誰かの大声で覚醒した。ゆっくり目蓋を開くと……目の前、息がかかるほど近くに逆さまの女の子の顔があった。

「……………」

理解不能な出来事に体が硬直する。

「起きたっすか？」

「うわぁっ!」

俺の頭がやっとな正常に動き出したらしく、驚いて飛び起きた。

「き、君は誰!？」

はつきり言っただ俺は女性に対する免疫があまりない、少し後退りながら少女を観察する。

艶のあるセミロングの黒髪にぱっちりした黒目、少し幼さの残る顔立ちだが間違はなく美少女と言って良いだろう。

「僕っすか？ 僕は神様っすよ」

「は？」

再び硬直する俺。

今コイツ神だとか言わなかったか？

俺はじりじりと少女から距離を取ろうとする。

「ム、今僕のことイタイ子だと思ったっすね!？」

「い、いや別に、そんなことは……あるよ」

とりあえず正直に答えてみた。まあノリだ。

「そおっすよね、僕はイタイ子っすよねー、アハハハーって違うわアー!!」

何処から出したのか、いつの間にか持っていたハリセンで俺を叩く自称神。

棒読みのノリツッコミが妙に痛々しい。

自分でも恥ずかしいのか、ちよつと赤くなっている。「ま、まあギヤグはここまでっす。今から真面目な話しをするっす、ちゃんと聞くっすよ」

何だか少しだけ自称神の雰囲気が変わった気がした。「とりあえず確認するっす。渡 幸一さん、君は今の自分の状況を分かっているっすか？」

ん？ コイツ何で俺の名前を知っているんだ……まあ、後で聞けばいいか。

とりあえず、今は聞かれたことについて考えよう。

「……………あれ？」

そういえば……………俺、車にひかれて……………その後どうなったんだ？

……………ていうか……………ここ、どこだ？

「え、あれ……………」

急に頭のなかがぐちゃぐちゃになる。

ナニモカモガワカラナクナル。

「……………とりあえず、君は死んだっすよ」

その言葉が俺を現実へと引き戻した。

「しん、だ？」

「そうっす、大型のトラックに轢かれた君は、ぐちゃぐちゃのミンチになったっす」

そう言っつて彼女は左手で俺の額に触れた。

唐突に、何かが頭に流れ込んできた。

ソレハ、グチャグチャデ、アカクテ、ナニカヨクワカラナイ

「うっつ……………」

俺は咄嗟に手で口を押さえた。

「うおおええ」

が、込み上げる気持ち悪さを抑えることはできなかった。

俺は胃から逆流してきたモノをぶちまけた。

「汚いっす、掃除するのは僕なんだから、あまりよごさないでほしいっすよ」

そう言っつて自称神は俺にハンカチを差し出した。

ありがたく頂戴する。

「…おま、えが…うぷ…あんなものを…見せるから…だろうが……………」  
俺は力なく悪態をつくくと、ハンカチで口を拭う。

できれば口のなかもすすぎたいのだが……………

「はい、お水っす」

まるで俺の心を読んだかのようなタイミングで水の入ったコップを差し出す自称神。



「悪い……」  
コップを受け取りうがいをする。  
「今度はこのバケツに吐いてくださいっす」  
俺の前にバケツを置く自称神、本当に何処から出しているんだ？  
とりあえず、うがいをすませることにしよう。

「落ち着いたっすか？」  
うがいを終えた俺をのぞきこむようにして自称神が言う。

「ああ、何とかな……」  
まだ少し気持ち悪いが、もう吐くことはないだろう。「じゃあ続きを話すっす。とりあえず君が死んだという事は理解したと思っす」  
「さっきのが俺の死体だって言うんだろ？」

それは一応理解したつもりだ。受け入れられるかは別として、とりあえず俺が死んだという事は分かった。「じゃあ、今ここに俺は何なんだ？ ちゃんと五体満足にそろってあるぜ」自分の体に違和感を感じなかった、いつもの俺の体だと思う。

「ああ、ここでは魂自体が体みたいなものっすからね」  
「タマシイ？」

コイツは何を言っているんだ？ 魂なんてそんなオカルトじみたもの……

一瞬否定しようと思ったが、すぐに自分の死の映像が頭に浮かんだ。

「…え、あれ？ もしかして、ここってあの世とかそういう感じの場所？」

自分たちの周りを見渡してみると、俺と自称神以外何も無い、真っ白な空間が何処までも広がっていた。某漫画の精神と時の部屋みたいな感じを想像すれば分かりやすいだろう。

いつの間にかバケツやら吐瀉物やらも消えていた。

「うーん、厳密には違っすけど、似たような所だと思ってくれとかまわなっす」

「はあ……」

ちよつと話しについていけないというか何というか……。

「で…あの…俺ってこれからどうなるんだ？」

「裁判を受けるっす」

サイバン？

「何で俺が裁判を受けなきゃならないんだ？ 何もしてないぜ」

「う〜ん……」

自称神は何か考えるような仕草をした。「とりあえず、死んだ者は全員裁判を受けるっす。そこで天国行きか地獄行きか、はたまた転生かを決めるんすよ」

「ふ〜ん」

天国とか地獄とかいまいち実感がわかない。

「どうやって決めるんだ？」

「一生を通して溜まった恩の量がプラスなら天国、マイナスなら地獄っす。たまにプライマイゼロの時もあって、その場合は転生っす」

「オンって何だ？」

漢字だと恩だろうか…。「恩っすか？ 一生のなかで他者から感謝されたりすると溜まっていくモノっす、逆に悪行を行うと減るっす」

「恩ねえ……」

人から感謝された記憶はないが、別に何か悪い事をした覚えもない。まあ、そこまで酷い結果にはならないだろう。

「恩はあの世の貨幣みたいなものっす、天国に行った者でも恩を使いきれば転生することになるっす」

「地獄に行った奴らはどうなるんだ？」

「恩の負債がなくなるまで強制労働っす、返済が完了できたら転生っす」

強制労働とかマジで勘弁したい。

「本題に戻るっす。君……ヤバイっすよ」

凄く真面目さ顔で言う自称神。

「やばいって、何がさ」

「負債つす。地獄で一億年くらい労働しないと返せないほど、負債が溜まっているっす」

「……は？」

「いちおくねん？」

「ナニソレオイシイノ？」

「だから……」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！ 俺、何もしてないぜ、何でそんなに負債が溜まっているんだ！？」

自称神の言葉をさえぎって叫ぶ。

「一億年も強制労働なんて冗談じゃない！！」

「詳しくは教えてあげられないっす。強いて言うなら、君のいた世界とここでは罪の基準が違うってことっすよ」

「何だよ…それ…」

納得できなかった、理不尽だった。

でも、俺にはこの状況を打開する案など思いつかなかった。「話しは最後まで聞くんすよ、さすがに可哀そうなので一度だけチャンスをあげるっす」

「ちゃん、す？」

この時、一瞬だけ自称神が本当に神様のように見えた。まあ、たぶん気のせいなのだろうが……

「まあ、チャンスとは言っても返済方法が変わるだけっすけど……上手くやれば一気に恩を返せるっす」

「……どうすれば良い？」チャンスと言うからには、どんな方法でも一億年強制労働よりはマシなのだろう。

今は藁にもすがりたい気分なのだ、方法があるなら何でも良かった。「これを使っす」

自称神がそう言った瞬間、俺の足元に何かが見れた。「うわっ」「驚いて飛び退く俺。」

「……猫？」

白と黒の斑模様という変なगराだが、それはまさしく猫だった。「

それは君の新しい体っす。君にはその体で別の世界へ行つて貰うっす」

「別の世界、ねえ……ていうか、何で猫？」

たぶん別の世界とやらで善行を積むとか、そういうことだろう。

「僕は猫以外の入れ物を創るのが苦手なんすよ、まあ可愛いから良いじゃないっすか」

「いや、可愛いからって……」

何だその理由。

「それにこれはただの猫じゃないっすよ、超高性能な猫っす。いわば超猫っす」何だよ超猫って……ていうか、コイツ猫を出してから妙にテンションたかいな。「で、何が出来るんだ？これ」

足元の猫を指差す。

「君しだいっすね、中に入った魂に合った能力が使えるっす。後、猫だけと言葉が話せるっす」

そう言つて自称神は猫を持ち上げた。

「とりあえず入るっすよ」「入るって、どうやって……うわっ」

自称神が手に持つ猫を俺に押し付けた瞬間、俺は猫の中に吸い込まれた。

「初めは違和感あると思うっすけど、しばらくすれば慣れるはずっす」

「うゝむ……」

何だかぎこちない。

とりあえず歩いてみるが、四足歩行というものに違和感を感じた。

「君は今からその体で別の世界へ行つて恩を稼ぐっす」

まあ、強制でないぶん地獄よりはマシだろうか。

「ただし、ノルマを設けさせて貰うっす」

「ノルマ？」

「そうっす、とりあえず一年以内に負債の1%を返済するっす」

「1%ってことは百分の一か、地獄の労働百万年分を一年で返せってか？」

それってかなりきついのではなからうか……

「頑張れば何とかなるっすよ、出来なければ地獄行きっす」  
まさしく一度きりのチャンスというわけか……

「じゃ、ガンバるっす」

自称神がそう言つと、いきなり俺の下の床が消えた。「へ？」  
浮遊感。そして急落下。

「ノオオオオオオオー!!」

こうして、俺の異世界猫生活は始まったのであった。

一話（後書き）

親指疲れた。

## 二話

ぐく、ぎゅるるー……

空腹だとうつたえるように腹が鳴る。

あの自称神によってこの世界に落とされてから大体一週間くらい経っただろうか、俺はいままで一度もまともなメシにありつけていなかった。

「お腹すいたにゃ……」

一応言っておくが、この《にゃ》という語尾はわざとつけているのではない。勝手になってしまうのだ、十中八九あの自称神の悪ふざけであろう。

話を戻す。

俺は今とても腹がすいている。

砂漠とか荒野とか食べられるものがほとんどないような場所に落とされたのなら、この空腹を自称神のせいにして『不幸だ!』とか叫んでいたのかもしれないが……幸運にも俺が落とされたのは小さな森の中だった。

食べられそうな物はたくさんある、猫の俺を食つような危険な生物にも今のところは出会っていない。

では何故俺が空腹なのかと言うと、食べられそうな物の全てが俺には取れなかったからである。

この猫の体、身体能力で言うとまさに猫版俺といった具合なのである。

元々の運動音痴に加え、長年の積み重ねによってなまりきった体。木にのぼれないから果物が取れず、すぐ息がきれて体力もないから食えそうな小動物を捕まえることも出来ない。

「はあ……今日も水だけかじゃ」

幸い近くに池があり水に困ることはなかった。ちなみに、その池には数種類の魚が生息していて、一度取ってみようと飛び込んだら見事に溺れかけた。別に俺はカナヅチというわけではない、慣れない猫の体では水中で思うように体を動かせなかったというだけである。それ以来一度も水の中には入っていない。

まあ、その日は猫になって落とされた次の日であったし、今なら少しは泳げるかもしれないが

ぎゅるる……

再び腹の虫が空腹をうったえる。

この空腹をどうにかしなければ、結局溺れてしまうだろう。今の俺にはフラフラと力なく歩くのがやっとで、水の中を泳ぐ体力なんてとても残っていないのだ。

「……今なら生トマトでも美味しくいただけるのじゃ」

恥ずかしながら、俺は生トマトが大の苦手である。ケチャップとか調理されたものは大丈夫なのだが（むしろ好きである）、生トマトだけはどうしても食べられなかった。

どこかの誰かいわく、空腹は最高の調味料なのだという。きっと今なら大の苦手な生トマトでさえ極上の食べ物に感じるだろう。

ぐゅるるる……



「うう……食べ物のことなんて考えるんじゃないにや」

余計に腹が減った。

十分ほどで目的の池に到着した。本来なら五分とかからない距離なのだが、空腹のせいかなりの時間がかかってしまった。さっそく池に口をつけのどを鳴らす。

「ぶはあゝ……んにや？」

水でそこそこの腹を満たし顔を上げると、池の反対に何か置いてあるのに気が付いた。

興味を引かれた俺はそれに近づいてみることにした。この池はそこまで広いものではないが、フラフラで満足に歩けない俺は少し時間をかけて反対側に到着した。

「……カゴだにや」

そこに置いてあったのは木製の、竹のような木で編まれたカゴだった。

誰かが忘れていったか故意に置かれていったかは知らないが、これは間違いなく誰か人がここにいたという証拠である。

こつちの世界に落とされてから一度もこの森から出たことがなかったのが付かなかつたが、もしかしたら近くに人が住んでいるのかもしれない。

もし近くに町や村があるのならそこへ行ったほうが良いだろう、何か食べ物が入るかもしれない。

最悪、生ゴミを漁れば良い。

我ながら実に情けないのだが、このまま森にいたって俺の能力では食べ物には入らないだろう。

他に良い案も浮かばない、それにかけてみるのも良いかと思えた。

「……そういえば、このカゴには何が入っているのじゃ？」

前足をカゴにかけて中をのぞき込む。

「にゃ！！こ、これはっ！！」

それは俺がこの一週間渴望してきた

「さかにゃああー！！」

念願のまともな食べ物が入っていた、カゴの中には十匹の池の魚。俺は何も考えずに飛びつこうとしたが、上手くいかずに倒れるカゴ。中に入っていた魚が地面に散らばる、その一匹に勢いよく飛びつく。

「う、うまいにゃあ！！」

俺が猫だからか空腹だからなのか、生のままの魚がとても美味しいと感じた。

この体になってから初めてありつけたまともな食事、俺は夢中になっただけで魚にかぶりつく。

この時の俺は、この魚は自分ではない誰かが取ったものだということとを完全に失念していたのだった。

二話（後書き）

書くのが遅い。

文章下手。

短い。

どうしようもないな……俺。

### 三話

それは丁度最後の一匹を食べ終えたときだった。  
首根っこに違和感を感じたと思ったら、勢いよく宙に吊り上げられた。

驚いて反射的に目をつぶってしまった。

「にゃーにゃー！」

そっと目を開けると、綺麗な金色の瞳があった。

「このクソ猫め、私たちの魚を全部たべちゃって……どうしてくれるのさ！」

多少舌足らずな感じでまくし立てるのは十四、五の少女だ。真っ黒な髪に金色の瞳が印象的で、少しやせぎみだが数年後には美人になっているであろう整った顔立ち。

そんな少女が怒り心頭といった感じで俺を睨んでいる。

「神様の使いだからって、調子に乗ると食べちゃうからね！」

「ふにゃー!?」

神様の使いと聞いてあの自称神が浮かんだが、すぐに思考を切り替える。

この少女はおそらく俺の食べた魚の持ち主なのだろう、その魚の代わりに俺を食うと言っているのだ。

「う、ごめんなさいですよ……食つのは勘弁してほしいのじゃ」「脅し文句かもしれないが、万が一にも食われるなんてゴメンである。大体、この少女が怒っているのは俺が何も考えず魚を食べたからだとりあえず謝罪はするべきである。」

「ね、猫が喋った……」

目をまるくして少女はポカンと口を開ける。  
なかなかの間抜け顔である。

「で、気がついたら我を忘れて魚にかぶりついていたのじゃ」

少女の名前はルーニというらしい。  
死んで猫になったとかは記憶喪失ということにして、こっちの世界  
でのことをルーニに説明した。

「ふん」

ルーニの反応は半信半疑といったところか。

「と言う訳なので、許してくれないかじゃ？」

「いや」

即答された。

「せ、せめて食べるのだけは勘弁してくれないかじゃ」

「それは良いよ、もともと食べる気なんてなかったから。神様の使いを食べたらどんな罰が当たるかわからないもの」

ほっと一息つく、とりあえず食われる心配はないようだ。

「そういえば、その神様の使いってというのは何のことだよ？」

「あなた猫なのに何も知らないの？」

ルーニがあきれ顔で俺を見てくる。

「だから、記憶喪失なのによ。出来ればいろいろ教えてほしいのによ」

「いや」

また即答。

「……でも、いろいろ手伝ってくれたら許してあげるし教えてあげる」

そう言うとルーニはニコリと笑った。

まあ、あれだ…拒否なんて出来なかった。

「べ、別に良いけど……ボクは猫に出来ることさえ出来ない駄猫だよ。それでも良いのによ？」

俺が人と話す時の一人称は《ボク》である。

家族と話す時には偉そうに《俺》と言うのだが、それ以外にたいしては《ボク》と言う。

なんというか、俺はまったくの他人にたいして自信がないのである。

「……ほんとに良いのにかや？　ボクは自分に出来る事が一つも思い浮かばないほどの駄猫なのにか、きつと約にたたないにか」

人間だった頃の俺ならともかく、こんな猫に何をさせようというの  
だろう。

「しつこいわね、別に良いつて言ってるでしょ。

で？　手伝うの？　手伝わないの？」

俺のいじいじとした態度が気に入らないのか、ルーニが怒気をはら  
んだ口調で聞いてきた。

「て、手伝うにか……」

内心びくびくしながら返答する。

「よろしい」

ルーニが偉そうに胸をはる。

「で、ボクは何をすれば良いんだにか？」

「それはね……後でのお楽しみよ」

何だよ……お楽しみって。

三話（後書き）

やっぱり書くのが遅いな俺。



## 四話

「ルー二嬢、一つ聞いても良いかじゃ？」

「何？」

「あれは何だにゃ？」

あの後すぐ、俺はルー二に森から徒歩で一時間程度の距離にある丘へ連れてこられた。

丘の上から見下ろす景色は、自然豊かでとても美しい。

ただ、そんな景色の中にあり得ないというわけではないが、元いた世界ではゲームや物語の中にしか登場しないモノを見つけ思わず俺はルー二にたずねていた。

「何って、大飛蜥蜴よ」

そう言って彼女はそれを指差した。

読んで字のごとく、まさしくそれは大きな飛ぶ蜥蜴であった。所謂ワイバーンというやつである。

翼のように発達した前足を広げ、グライダーのように空中を滑空している。ただ、その前足は鳥のように羽ばたくことは出来ないようになっているらしく、あまり長距離は飛べないようだ。

「ファンタジーだにゃ……」

呆然とつぶやく。

すると、大飛蜥蜴が突然飛行の軌道を変えて一直線に飛んで行く。何か獲物でも見つけたのだろうか。

「よし、行くわよ」

それを見ると、ルー二が早足で歩き始めた。

「何処にいくのかにや？」

俺は急いでルー二に追い付くと、彼女の横に並んで歩く。まあ、当然歩幅が違うから俺は歩くというより半分走っているのだが……。

「大飛蜥蜴の巣よ」

「巢！？ そんな場所に行って大丈夫なのかにや？」

目測だか、さっきの大飛蜥蜴は人の三〜四倍の大きさがあるように見えた。

どう考えても主食は肉だろう、そんな生物の巣に行くのは危険じゃないのだろうか？

「もしかして、あの蜥蜴は人を襲わないのかにや？」

「襲つよ、一年に何人かは食われているんじゃないかな」

平然と言つてのけるルー二。

「……そんな危険な生き物の巣に行って何をするにや？」

ぶつちやけ、そんな危ない場所に行きたくはない。

「卵を採りに行くの、大飛蜥蜴はちょうど今が繁殖期なのよ」

卵ねえ……それほどの価値があるのだろうか？命をかけてまで採り

にいく価値が……。

「それは美味しいのかにゃ？」

「食べたことないから知らないよ」

「……？ じゃあ何のために採りに行くのにゃ？」

うーむ、何か物事を考えるとすぐ食い物に直結してうまく頭がまわらない。

「売って金にするのよ、結構な額になるわ」

「金かにゃ……」

「何よ、悪い？」

「いや、全然悪くないにゃ」

金はあるって困る物でもない。

「ここよ、この奥に大飛蜥蜴の巣があるの」

丘の上から少し下り、崖のようになった場所に大きな横穴があいていた。

「じ、ここかにゃ……」

緊張で全身の毛が逆立ち、恐怖で体が震える。

「ぼ、ボクは何をすれば良いんだにゃ？」

そういえば、結局俺は何をやれば良いのか教えてもらっていない。お楽しみだとか言っていたが……何か嫌な予感がする。

「そういえば、まだ言っていなかったっけ」

こういう時、俺の予感によく当たるのだ。まあ、よく当たるとは言っても大概の場合はすでに手遅れで、大して役に立たないのだが……。

「や、やっぱり辞退させていただき」

「困よ。あんたが逃げ回っている間に私が卵を手に入れる、完璧ね」

何か自信満々なルーニ。

やはり手遅れだったようである。

「いやいや！？ 困って何ですにゃ！？ つーか、にやぜにそんな自信満々！？」

「うるさい、手伝うって言ったでしょ？ ルーニ様のために粉骨砕身、全てをなげうって馬車馬のごとく働きますと言ったあの言葉は嘘だったの！？」

ヨヨヨと泣き崩れるような仕草をするルーニ。

「いやいやいや！？ 後半はまったく記憶に御座いませんのにや」

何故に出会ったばかりの少女に一生を捧げなければならんのか。そりゃあ世の中広いから、喜んで捧げる変人もいるだろうが……。

「でも前半は言った覚えがあるのよね？」

「うぐ……た、確かに言ったのにや」

ちゃんと確認しなかった俺が悪いのだろうか……。

「だったら文句はないよね、囿……ガンバツテネ」

ルーニは無表情でそんなことを言う。

これ以上ごねるなら巢に投げ込んで無理やり囿にすると、彼女の目がそう語っているように見えた。

どうやら覚悟を決めるしかないようだ。

## 四話（後書き）

背景の描写が上手く書けない。

## 五話（前書き）

だいぶ間があいてしまった。

## 五話

GurAaAaAa!!

洞窟中に反響した轟音が嵐のように俺を襲い、地震のように地面を揺らす。

「ぐにゃあああ!?!」

俺はごろごろと地面を転がり悲鳴をあげた。とっさに耳を塞ぐことができず、俺はその爆音をもろに聞いてしまったのだ。

視界が揺れる、音叉を叩いたような高音が頭の中に鳴り続ける。頭が痛い、身体に力が入らず吐きそうなほど気持ち悪い。

「……………しえ」

だらだらと唾液を吐き出すと、少しだけ気持ちの悪さが収まってきた。

段々とぶれる視界も正常に戻っていく。

ぼんやりとしていた景色がはっきりと見えてくる。

そして……………それと目があった。

暗い洞窟の中で薄く光る二つの目、獲物を噛みちぎるためのザラリと並んだ鋭い牙。





入り組んだ場所ならともかく、ここから入り口まで横道のない一本道である。

すぐに追い付かれてしまっただろう。

現実に絶望しながら、それでも俺は走るのだった。

「……九死に一生を得たのにや」

ルーニとの集合予定場所にあった大きめの岩の上で、俺はぐったりと倒れている。

肉体、精神共にこれまで経験したことがないほど疲れきっていた。

結論から言うと、俺はあの蜥蜴から逃げ切ることに成功した。

正直、何で逃げ切れたのか自分でもよく分からない。走っている最中に振り返る余裕なんてなかったから、いつの間にか背後にいたはずの蜥蜴がいなくなっていたのだ。

あのままでは確実に喰われて死んでいたので助かったのだが、実に不可解である。

まあ、俺一人で何故かと考えたところで答など出ないだろうから、運がよかったのだと思うことにした。

もしかしたら、あの蜥蜴には変な習性でもあるのかも知れない。  
今度ルーニに聞いてみようと思う。

「ご苦労様、お陰で楽に卵がとれたよ」

助かった理由を色々思案していると、いつの間にかやってきたルーニがへばる俺の顔をのぞきこみ、背中に背負ったカゴにすっぽり収まった大きな卵を見せてきた。

「それは……よかったにゃ……」

「何か、あんた死にそうね……ちよつと体力なさすぎじゃない？」

しよがないじゃないか、万年運動不足の俺にはとてつもなくハードな内容だったのだ。

「ふっ……ボクの……体力……を……なめるにゃ……よ……」

「いや、何で自慢気なのよ……？」

別に良いじゃないか、ちよつと格好付けたかったのである。

いや……まあ、実際は凄まじく情けないのだけだね。

「この後は……どうするのにゃ……？」

出来ればしばらく休みたいのだが、まだ何かやるのだろうか。

「うーん、とりあえず今日はもう何もないかな。夜までには帰りたいしね」

空を見上げるルーニ。つられて俺も空を見上げる。

いつの間にか、空があかく染まり始めていた。

この世界の夜には月や星しか明かりがない。

猫は夜行性で夜目がきく、だから今まで夜の暗さに困ることはなかった。

だが、人であるルーニにとっては違うのだろう。

「ルーニの家はここから遠いのかにゃ？」

息はだいぶ整ったが、まだ動き回れるほど体力は回復していない。

「今から歩けば、ギリギリ日が落ちる前に着けるかな……歩ける？」

心配するように俺を見るルーニ。

「出来ればもう少し休んでいたいのにゃ……」

四肢に力を入れてふらふらと立ちあがる。

正直かなりきついが、頑張ろうと思う。

「……ふう、しょうがないな」

そう言うと、突然ルーニがのそのそ歩く俺を掴みあげた。

「に、にゃ！？ ボク何かやっちゃったかにゃ！？」

デジャビュを感じる状況に慌てる俺。

「しばらくここに乘ってなさい」

ルーニは摘みあげた俺を自分の頭の上に乗せた。

「……にやんで頭の上？」

何か妙に居心地が良いので問題はないのだが、気になったので聞いてみる。

首とか痛くならないのだろうか？

「うーん、何となく？ 何というか、妙に落ち着くのよね……おさまるものがおさまったというか、そんな感じ」

うむ、確かに何故だか妙に落ち着くのだ、特にこの二つの突起物の間にびったりとはまる感じがなんとも……。

「……ん？」

何か違和感が……。

俺は今ルーニの頭の上に乗っている。

彼女の頭の上に乗って初めて気が付いたのだが、何か髪の毛に隠れるほどの棒のようなモノが生えているのである。

それはまるで生えかけの角のような……。

「……にやー、この頭にある硬いのは何ですにや？」

とりあえず聞いてみることにした。

「何って角に決まってるじゃない、と言っても十日前に生えたばかりだけだね」

「……………っの？」

少し嬉しそうに語るルーニと固まる俺。

え……………？ 何か今普通に角が生えるとか言った？

え……………？ 何で頭に角なんて生えてんの？

混乱混乱混乱中……………

「……………何よ、どうかしたの？」

そんな俺をいぶかしむようなルーニ。

「え、いや……………ちょっと…考え事だにや……………」

よく考えてみれば、先程も大飛蜥蜴とか言うファンタジーなモノに遭遇している。

もしかしたら、この世界では人の頭に角が生えるのはいたって普通の事なのかもしれない。

「えーと、人にはみんな角が生えているのかにや？」

「生えてるわけじゃないでしょ……………て言うか、あんた本当に何も覚えてないのね」

「へ？ ……あ、信じてなかったのかにや？」

そういえば記憶喪失ってことにしたんだっただか…。

「いや、いきなり猫が喋りだして『ボクは記憶喪失だにや』とか言われてもね……怪しすぎでしょ」

「……まあ、確かにそうだにや」

考えてもみれば確かに怪しいな、俺がルーニの立場なら信じないだろう。

こうしてルーニの頭の上で揺れながら、一路彼女の家を目指すのだった。

## 五話（後書き）

次はもっとはやく投稿したい。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1257o/>

---

ネコでも!

2011年7月28日10時26分発行